

ART KISS LETTER

vol.50

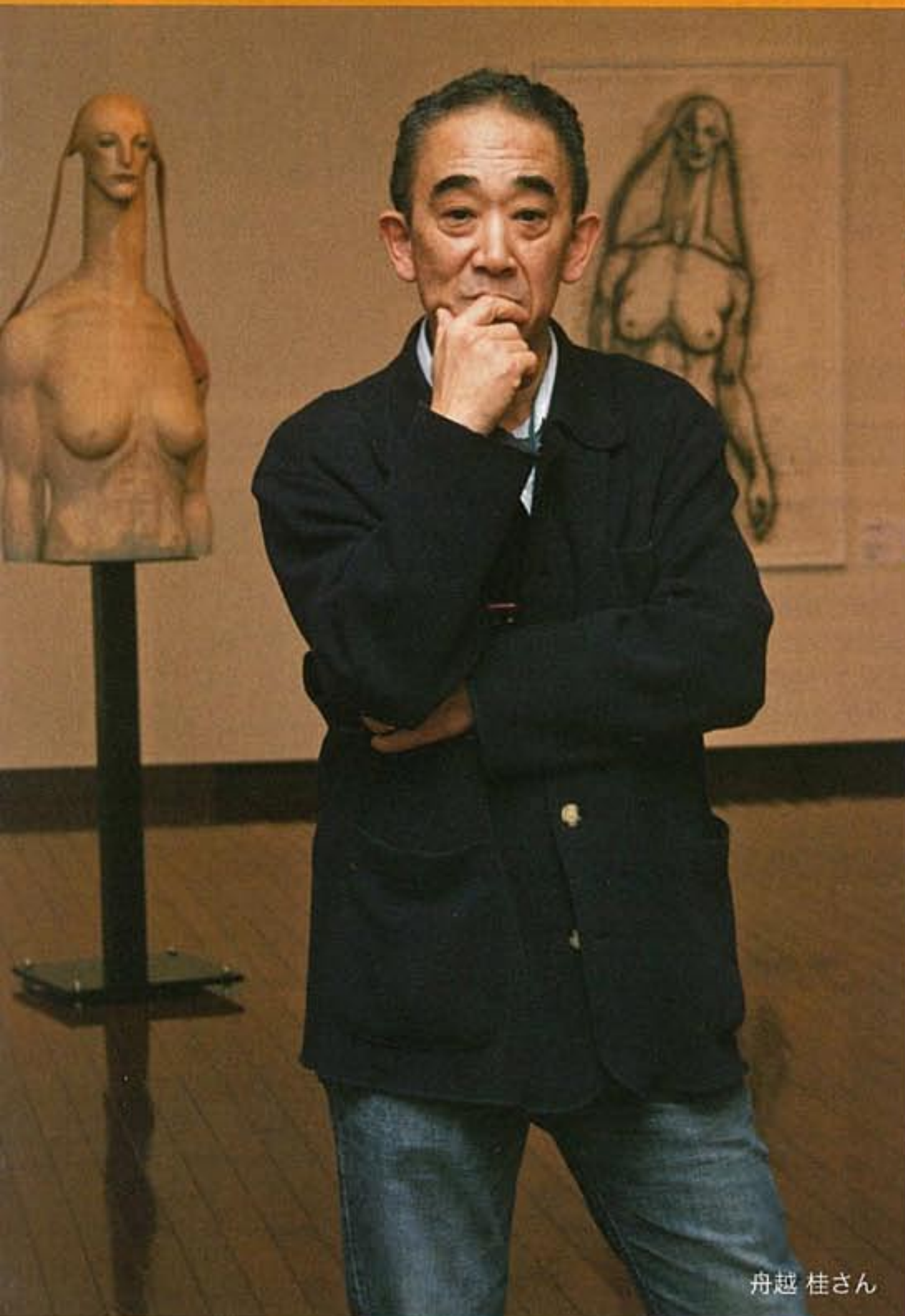
FREE

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

WINTER
[2011.冬号]



舟越 桂さん



恵楓園絵画クラブの作品群

「舟越桂 2010」展が開幕しました

今回は1980年代、90年代、そして最新作までの彫刻22点と、版画、ドローイングを紹介しています。80年代の静寂が漂う肖像的な作品、90年代の山シリーズの重厚な温かみのある作品、そして2000年以降のスフィンクスを中心とした緊張感のある展開を見ることができます。初日のアーティスト・トークでは、舟越桂さんが、写真をまじえながら、頭部と胴体のつなげ方などの制作方法やコンセプトを2時間たっぷりとお話下さいました。《見晴らし台のスフィンクス》のなかに埋め込んだ自刻像のエピソードなど、約230名の聴衆の方々も舟越さんにぐっと親しみを覚えたようです。会場からの質問にも丁寧に答えいただき、より舟越さんの作品、お人柄を知る機会となりました。(Y.H)

「光の絵画 vol.3—祈りの風景—」

「舟越桂 2010」との同時開催として「光の絵画 vol.3」が開催されました。今回は会場をメインギャラリーに移して、菊池恵楓園絵画クラブの作品のみならず、島崎の待労院診療所に残されている絵画、日本で初めてのハンセン病療養所として設立された御殿場市の神山復生病院(復生記念館)の貴重な写真資料などをご紹介しています。特筆すべきは、同時開催の舟越桂氏の父である昭和を代表する彫刻家、故舟越保武氏制作の《ダミアン神父》が導入部分に、緻密な鉛筆画で観る者を圧倒する木下晋氏の祈りをテーマにした作品などが展示されている点でしょう。それぞれの祈りの風景が感じられる空間となりました。(E.Z)

巻頭言

「舟越桂」—「光の絵画」、その出会いと調和

熊本市現代美術館館長 桜井武

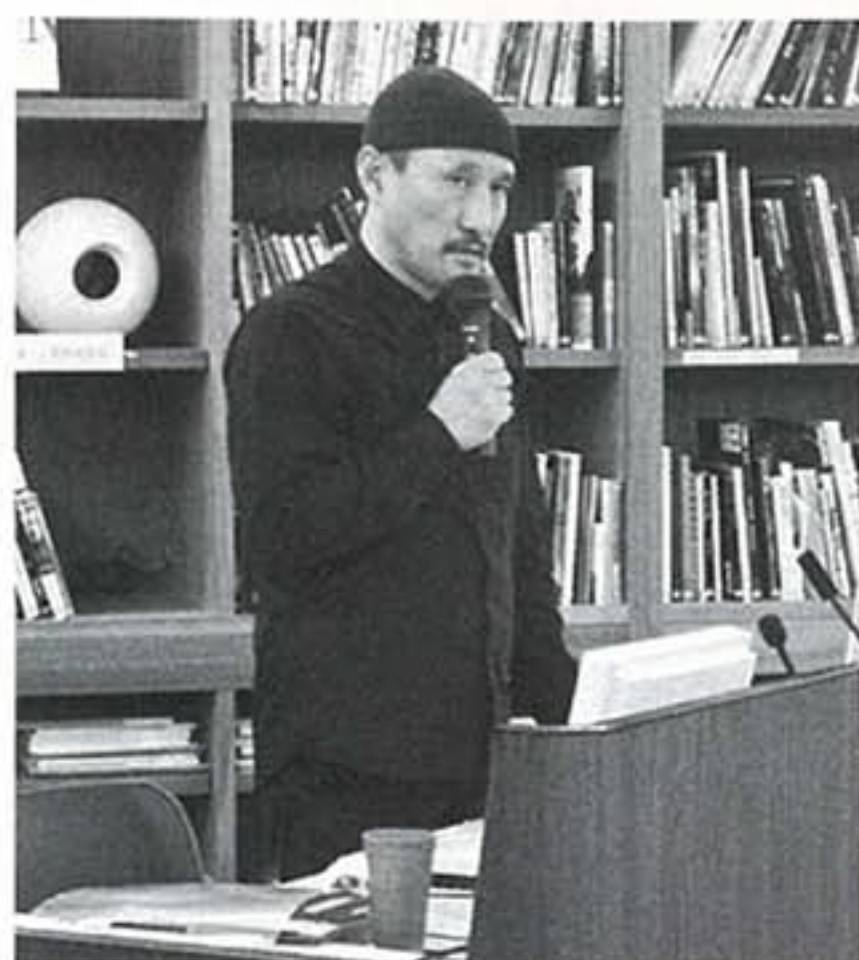
今回の「舟越桂」展と「光の絵画」展は、もともと全く異なるふたつの展覧会の同時開催であった。企画動機やコンセプト、そして担当学芸員も異なり、違う方向性から実現に向かった。舟越桂は、高度の造形性と詩情豊かな作品で国際的に注目される作家。一方「光の絵画」は、長年苦難の道を行ってきた国立療養所菊池恵楓園絵画クラブの会員の方々の作品が主となる。このふたつの企画がどこでつながるか、不安がよぎる時期もあった。ところが「光の絵画」展の導入部に、舟越桂の父上である舟越保武の代表作「ダミアン神父」像を入れることにより、一挙につながりが生じ始めた。ダミアン神父はハワイのモロカイで、ハンセン病患者のために、心身を捧げた神父。それは保武の渾身の力が籠められたブロンズ彫刻である。初めて訪れた熊本で舟越桂さんには様々な出会いがあったようだ。舟越彫刻に関連のあるクスノキの巨木群。熊本市島崎教会祭壇に掛けられた、舟越保武作のキリスト像。舟越家には同じブロンズ像が残されており、桂さんは感慨深げにその祭壇を見つめていた。全く初めての土地で、彼の熊本とのつながりは予想を超えた広がりや深まりを見せた。会場にやってきた彼がまず口にしたのは、ジャンルや技術を超えて、創造の根源で通じ合える同時開催「光の絵画」の素晴らしさであった。舟越さんは「美は調和である」と言う。それは、単なる事物の融合を超えて、全く異質で対立するものが生み出す、ダイナミックな調和を意味した。今回の企画では、事を積極的に進める過程で、当初想像しなかった豊かな調和が生み出されたことがひとつの成果となった。

熊本県現代美術館の活動
MUSEUM INFORMATION

ユック・クンビョン講演会「イメージから広がる世界」

2010.10.3

アジアン・アート・コレクション展出品作家であり、世界的に活躍する韓国出身のアーティスト、ユック・クンビョンさんによる講演会が行われました。当初はワークショップとして予定されていたため、参加希望者の方には、作家から質疑応答が行われるスタイルに変更になりました。講演会の冒頭では、色について考えてみよう始まり、「赤」や「青」から思い付くことを質問。例えば「青」は「海」や「空」や「寒い」などのイメージが参加者から挙げられ、それらすべてもともと色を持たないものであることを指摘。また、「青」は、アメリカ製のヒーローのコスチュームに多用されることから、資本主義社会や勤善懲悪のイメージが付随して流通しており、色が社会や流行、思想と密接に結びついていることを指摘しました。現代が急激に、「読む文化」から「見る文化」に変化してきていることに言及し、アーティストとして、最初から最後までイメージを作り出すその困難さと大変ゆえの面白さと、そのイメージの源泉は世界の過去の歴史を振り返って現代に生かす時、そして自分自身をみつめなおした時に発見できるというお話で締めくくられた、非常にエキサイティングな講演でした。また、講演会後半では、ユックさんのこれまでの作品群について、DVD 上映で紹介いただきました。(H.T)



【参加人数：35人】

藤本由香里講演会「マンガの楽しみ～アジアの中の日本マンガ」 2010.10.11

アジアン・アート・コレクション展のアジアン・イベントとして、熊本出身のマンガ評論家・藤本由香里さんによる講演会が開催されました。編集者時代のマンガとの出会い、アジアにおける日本マンガの特質とその位置、中国、韓国をはじめとする東アジアのマンガ事情、マンガによる町おこしの現状と展開、今後の日本マンガの可能性など、多岐にわたってお話いただき、非常に密度の濃い時間となりました。またレクチャー終了後は、お客様からの熱心な質問が相次ぎ、大変な熱気に包まれた講演となりました。(A.A)

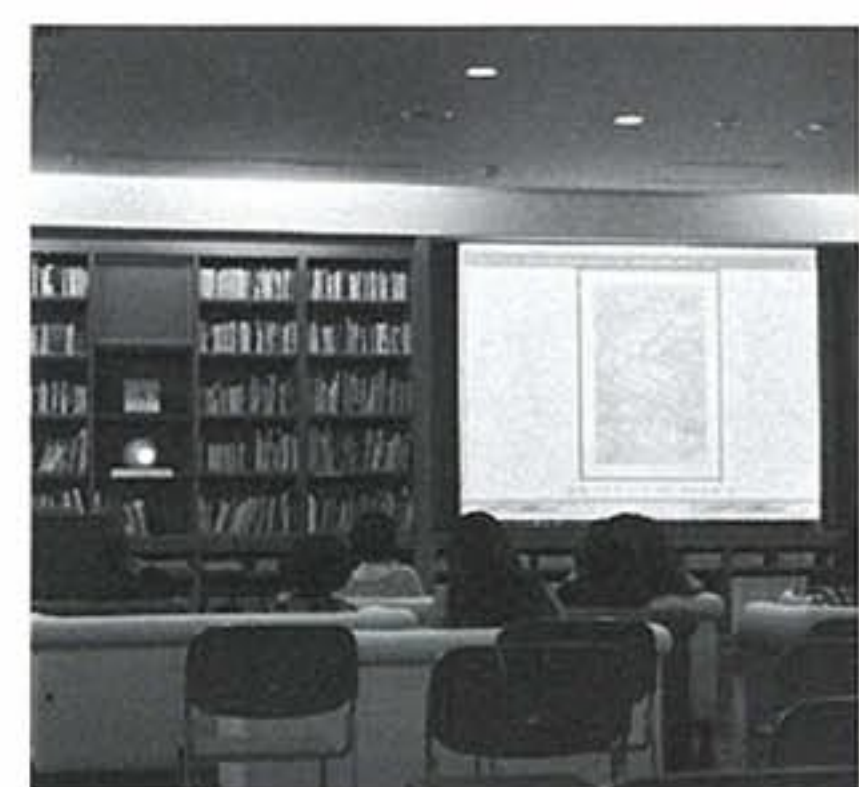


【参加人数：60人】

展覧会関連講演会「古屋誠一展とサイコアナリシス展の開催について」

2010.10.23

両展企画学芸員の富澤が、両展の開催までの経緯と、出品作家と作品について紹介しました。古屋展は東京都写真美術館との共催展、サイコアナリシス展はトーキョーワンダーサイトとの共催展でしたが、両展を同時に当館で開催することによって、(古屋さんは30年来オーストリア在住の写真家です)、オーストリアの「今」をリアルにより深く体感できる展示室内になっていることに冒頭でふれました。続いてオーストリア、グラーツの古屋さんご自宅周辺風景を紹介し、作品制作の現場が相当に生活空間内に密着しているという彼独自のスタイルについて提示しました。また、これまでの作品集すべてから、改めて「古屋さんご自身が写りこんでいる作品」をピックアップし、年代順に俯瞰してみることで、代表作「メモワール」に常に登場する彼の妻クリスティーネとの関係性がそれぞれどのように映りこんでいるかを、会場で観客の方々とともに確認しました。サイコアナリシス展に関しては、ウィーンなどにある現在も使用される著名な建築物をテーマに映像作品が制作されていることを紹介、建築物の特性、その魅力、その歴史を題材として、出品作家(映像作家)が何を見出し制作したのかを、彼らの他の作品を参照しつつ、出品作品を読み解きました。(H.T)



【参加人数：30人】

ファミリー&プレママツアーを行いました

2010.11.13

「古屋誠一 メモワール」、「サイコアナリシス」の二つの展覧会のファミリー&プレママツアーを行いました。今回は最初に大きな世界地図が登場。二つの展覧会を結ぶキーワードとなる「オーストリア」という国について確認しました。なかでも、「古屋誠一」展は、シリアスな内容ですが、家族の絆や、元気で一緒に暮らせるありがたさを、皆さんかみしめられていたようでした。(A.S)



【参加人数：12人】

熊本文学隊主催、熊本市現代美術館共催で、写真家石内都さんと詩人伊藤比呂美さんのトークショーが開催されました。石内さんの『1・9・4・7』、『手・足・肉・体』、『mother's』、『ひろしま』などをスライドで見せていただきながら、伊藤さんとの出会いのエピソードから、一貫して「何」に注目して写真を撮っているか、という深いところまで、じっくりとお聞かせいただいたトークショーでした。特に印象的だったのは、『ひろしま』の作品のお話の際、「箱から出して、しわをのばしてひろげたときに、よく今まで生きていたね…！出会えたね…！という気持ちで撮影しています」という発言でした。伊藤さんによる『手・足・肉・体』収録の詩の朗読もありました。伊藤さんの(いまにも連なる当時の)身体感覚と、それとは全く違う観点から伊藤さんの身体をみつめて撮影した石内さんの感覚との組み合わせの面白さを鮮烈に感じる瞬間でした。(H.T)

【参加人数：90人】



第8回お話し玉手箱 LIVE

2010.10.24

RKK アナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんによる文学作品の朗読会も8回目を迎えました。今回は三浦哲郎「メリーゴーラウンド」、オスカー・ワイルド「幸福の王子」の2作品の朗読が行われました。今年、2010年の8月にご逝去された三浦哲郎氏への追悼の念も込め朗読された「メリーゴーラウンド」。静かに語られるどこか哀愁を帯びた物語に会場の皆様が聞き入っていました。優しく美しく、しかしいくばくかのアイロニーも込められ、悲しくもあるワイルド「幸福の王子」。王子とツバメの会話によって進められていく物語が、本田さん、福島さんの二人の見事な語りもあって、聞き入る人の心に沁みわたります。なかには涙ぐんでしまう人もいたようです。本日は昼頃の雨のためか、来場者は50名といつもよりは少なかったのですが、初めて聴きにいられた方の割合が高く、楽しんでいただけたようです。(M.F)

【参加人数：50人】



詩の朗読会

2010.9.24 & 10.28 & 11.25

第82回

2010.9.24

テーマは今年の干支で、「トラ(虎・寅)」をもとに、10名の方が13作品を発表されました。1日千里を走ると謂われる虎をハンカチに刺繍して戦争に行く息子に持たせた母親を語る詩や、動物園に行って実際に虎を見て考えた詩、寅さんの映画を見て考えた詩、寅年の女性についての詩、虎に「なってみる」詩など、それぞれの興味のひろがりを感じられた会でした。

第83回

2010.10.28

テーマは「写真(まなざし)」です。「サイコアナリシス展」「古屋誠一 メモワール」展にテーマをあわせての開催でした。11名の方が詩作を発表されました。うち、飛び入り参加の方も1名いらっしゃいました。ひそかに遺影をテーマとした詩作や、食事にきゅうりが続いたあとの祖母の視線など、身近な家族のまなざしをとりあげたり、一方、街角でみる知らない女性をみる自分の視線や、明日をみるまなざし、というものなど、多様な「まなざし」の表現が提示されました。

第84回

2010.11.25

テーマは「風物詩」でした。12名が発表されました。風鈴やイルミネーションなど様々な季節の風物詩を主題として、穏やかな雰囲気の中詩が朗読され、多くの方がそれぞれの詩の世界にゆっくりと耳を傾けていました。また、「電気館100年の歴史」展にちなんで詩も発表され、バラエティ豊かな朗読の夕べとなりました。(H.T)

アジア映画フェスティバル

2010.10.1-3

熊本市が展開する「東アジア戦略 アジアンホリデー in くまもと」の関連イベントとして、アジア映画フェスティバル vol.1 を開催しました。現在のアジア地域の状況を映画から理解してもらい、アジア地域との交流を深めていくきっかけになるよう継続的に開催していきたいイベントとなりました。(E.Z)

【参加人数：120人】

◆上映作品◆

- 10月1日(金) 10:30 ~ 「深海 Blue Cha-Cha : BLUE CHA CHA」 2005年 台湾映画 108分
 14:00 ~ 「トゥヤーの結婚 : TUYA'S MARRIAGE」 2006年 中国映画 96分
 10月2日(土) 10:30 ~ 「今、このまががいい : SISTERS ON THE ROAD」 2008年 韓国映画 90分
 14:00 ~ 「五人少女天国行 : FIVE GIRLS TO BE MARRIED」 1991年 中国映画 94分
 10月3日(日) 10:30 ~ 「海角七号 / 君想う、国境の南 : CAPE No.7」 2008年 台湾映画 130分
 14:00 ~ 「ビバ! ラブ : VIVA! LOVE」 2008年 韓国映画 100分

このワークショップでは、サイアノタイプ（ブループリント・青写真）、フォトグラムと呼ばれる古い写真の技法を使って、ポストカードとコースターを制作しました。まずは、科学の実験のように薬品を混ぜ合わせて感光液を作り、紙に塗るといった感光紙の制作過程を見学。感光紙に直接物を置いて感光させるフォトグラムでは、葉っぱや切り絵、ビーズ、文房具などを使ってデザインを考えます。デザインが決まったら、焼付機にセットしてブラックライトの光で焼付→水洗で現像が完了です。焼付後の灰色がかかった紫色が、水の中でサイアノタイプの特徴である鮮やかな紺色に変わっていく様子を見て、参加者の方からは感嘆の声が…。太陽の光でも焼き付けることができるこのサイアノタイプ、この日はあいにくの曇り空でしたが、光に当てる時間を延ばして外でも挑戦。紫外線で徐々に感光していく様子を目で確認して、「光で焼き付ける」という写真の原理を実感することができました。最後は完成したポストカードと一緒に記念撮影をして解散。笑顔あふれる楽しいワークショップとなりました。(S.Y)



【参加人数：7人】

STREET ART-PLEX 協働事業
EXTRAVAGANZA 2010 ショパン メモリアルコンサート

2010.10.16

ショパンの命日を偲び、STREET ART-PLEX の協働による「EXTRAVAGANZA ショパン メモリアルコンサート」を毎年開催しています。2010年の今年は、ショパン生誕200年を記念して、熊本でピアニストを志す高校生から、ピアニストの諸田由里子さんまで、ショパンを愛する人々が心を込めて演奏する、心温まるコンサートになりました。(A.A)



【参加人数：120人】

ミュージック・ウェーブ

2010.9.25 & 11.14 & 11.27

No.038
バイオリン&ピアノデュオ ORANGE

2010.9.25

熊本県内で活動するバイオリン & ピアノデュオ ORANGE によるコンサートを開催しました。カジュアルなTシャツとデニム姿が印象的なお二人。演奏が始まると、息の合ったピアノとバイオリンのハーモニーがホームギャラリーに響きわたり来場者を魅了しました。ジブリ作品やポップスなど馴染みのある曲や、ジプシー音楽、オリジナルの曲まで幅広く展開され、心躍る楽しいコンサートになりました。(M.O)



【参加人数：80人】

No.040
CAMK ピアノコンサート vol.10

2010.11.14

今回で10回目となるCAMK 秋のピアノコンサートが開催されました。今回出演して下さったのは11名のピアノボランティアのみなさんです。10回記念の来場者からのリクエストコーナーでは、「瞳をとじて」「星に願いを」「Your Song」など皆さんにおなじみの曲も弾いていただきました。(E.Z) 私の知っている曲が多く聴いていて楽しかったです。リクエストコーナーでは、私のリクエストしたバラード第一番ト短調(ショパン)も演奏されたので嬉しかったです。(アンケートより)

【参加人数：80人】

No.041
木管五重奏団 モクシィ

2010.11.27

熊本県内で活動を行う、木管五重奏団モクシィによるコンサートを開催しました。フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットによる五重奏は、多くの作曲家によって作品が作られている伝統的な編成です。映画音楽からクラシック音楽まで、幅広いジャンルを豊かなハーモニーによって演奏していただきました。小さなお友達は音楽に合わせて、お母さんと一緒にリズムをとったり、指揮を試みたりと、幅広い年齢の方に楽しんでいただく、ひと時となりました。(A.A)

【参加人数：80人】



第13回

2010.9.18

今回は秋らしく、『赤とんぼ』の輪唱でスタートしました。テーマは「できるかな?」。いいおへんじできるかな?早口で手遊び歌できるかな?よーいどん!できるかな?などチャレンジものが満載でした。(C.T)

【参加人数: 26人】



第14回

2010.10.16

テーマは「ハロウィン」。いつもの人形劇の舞台にもカボチャのシールを飾り、魔女・カボチャのコスプレで子どもたちをお迎えしました。なかには怖がる子もいましたが、手を大きく広げる手遊び歌『ぐーちーぱー』や、軽快なリズムで読み語られる『さつまのおいも』に怖い気持ちもどこかへ飛んでいったようでした。今回は親子で楽しめる遊びもとりいれ、子どもたちも大喜びでした。(C.T)

【参加人数: 10人】



第15回

2010.11.20

テーマは「家族」。絵本『おとうさん あそぼう』、紙芝居『おかあさん みつけた』をはじめ、家族の絵本をたくさん紹介しました。手遊び歌『もも もも もも もも』では子どもたちの笑顔があふれんばかりに見られ、楽しい会となりました。(C.T)

【参加人数: 37人】

九州新幹線全線開業プレ・イベント 熊本市東アジア戦略 アジアンホリデー in くまもと G3 vol.73 アジアン・アート・コレクション展

2010.9.18-11.14

熊本市が展開する「東アジア戦略 アジアンホリデー in くまもと」*の関連事業として、熊本市が収集してきた美術コレクションよりアジアの映像作品をご紹介します。館内のパブリックスペースに展示しているアジア作家の作品にも改めて光をあてました。世界的に活躍するアジア作家の現代美術を通して、アジアの文化への理解を深めるとともに、地域や時代を超えて、私たちが共有する普遍的な世界観を再認識していただけたのではないのでしょうか。会期中には、アジアの映画を紹介する「アジアフォーカス・イン・くまもと」、出品作家によるレクチャー、日本が誇る文化であるマンガをアジアの視点より見つめる講演会など多彩なイベントを開催しました。(AA)

(*東アジアからの観光コンベンションの誘致や学術提携を目指して、熊本市の魅力を発信するプロジェクト)

G3 vol.74 電気館 100年の歴史展

2010.11.17-2011.1.10

CAMK 映画企画第3弾「電気館 100年の歴史展」が開催されました。今年の1月1日で100歳を迎え電気館の貴重な当時の写真や、電気館で上映された映画の手描き看板、パンフレット、チラシなど懐かしい資料が並びました。また、電気館創設者の窪寺喜之助氏が活動弁士としても活躍していたことにちなみ、今ではなかなか観る機会のない活動弁士が活躍していた頃の映画を常時上映し、当時の電気館を体感できる展覧会となりました。(E.Z)

【参加人数: 50人】



GIII 関連上映会 「遠くの空に消えた」

2010.11.21

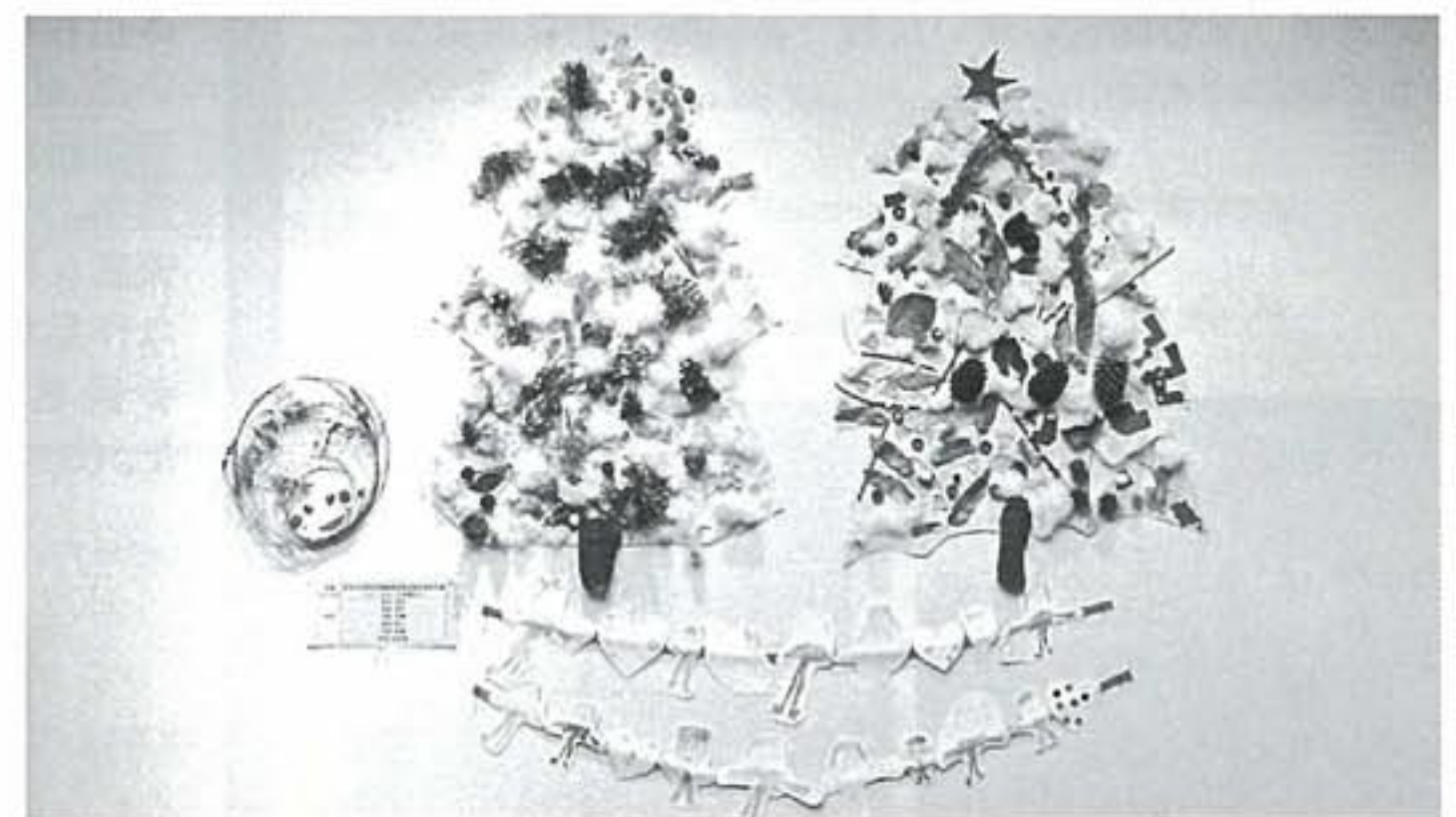
「電気館 100年の歴史展」関連イベントとして上映会を開催しました。上映作品は熊本市出身の行定勲監督作品「遠くの空に消えた」。今回は電気館創設者の窪寺喜之助氏が活動弁士としても活躍していたことにちなみ、展覧会場でも活動弁士を紹介していることから、映画の「音」を意識してもらおうと日本語字幕付きで上映しました。映画の中の音の重要さを感じていただけたようです。(E.Z)

【参加人数: 80人】



階段ギャラリー報告

11月の階段ギャラリーでは、「静・動・美一夏、天草にて 熊本市立東町中学校美術部作品展」が開かれ、美術部の皆さんが夏休みに天草に行き油絵にチャレンジした作品が展示されました。また、12月には「熊本大学教育学部附属特別支援学校 中学部作品展」が行われ、授業の中で取り組まれている作品づくりや、クリスマスモチーフにした作品が楽しく展示されました。(AS)



ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう?」の意です

第 32 回 熊本県書道展

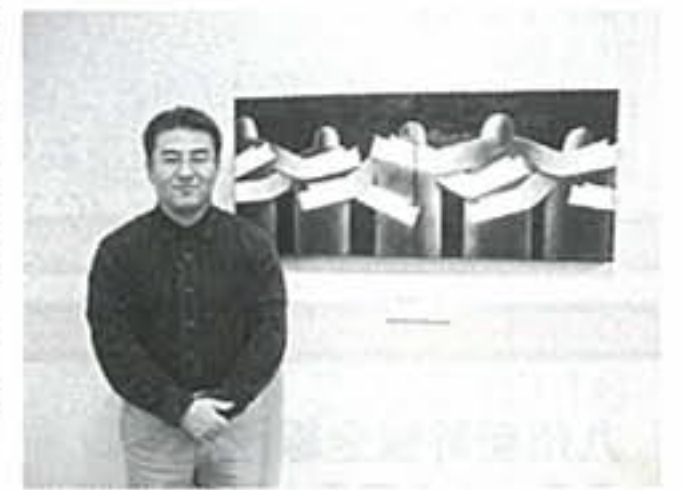
2010.9.14 ~ 9.20 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町 2 096-351-8411

熊本書法文化振興会(三嶋天鴻会長)主催の熊本県書道展が、県立美術館分館の全館を使って開かれた。これは、熊本書芸振興会が第30回まで開催してきたものを、同会解散の後を受けて、新体制で開催したものである。内容的には、従来の方式を踏襲したものと言える。1階のギャラリーに陳列されたこの会の指導者層、すなわち参与、会員の作品は、流石に各々独自の風格を漂わせ、精彩度安定度は群を抜いていた。4階の第3室に陳列された準会員、無監査、会友の部は、いわば各団体の大幹部や中堅層で、活力に満ちた研究的な意欲作が多く眼についた。中でも、工夫された墨の使い方や独自の滲みの面白さを見せた会員推挙の西村草翠さんと、迫りに満ちた最高賞の波山希草さんの作品が印象に残った。(T.M)

音のない青の世界—デフアート(ろう者の芸術)—乗富秀人

2010.11.16 ~ 12.4 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町 10 番 25 号 323-1158

デフアートとは「手話」と「ろう文化(音のない世界)」をテーマにした絵ということを知り、会場に向かった。作家が来場者と手話で話している静寂な空間に足を運び入れたとき、今この空間では私が障害を持って存在していることを実感しながら作品を鑑賞した。深い青色から白色へのグラデーションが本来は冷たく感じるのに、あたたかみを感じるのが不思議な気がした。ろう者の方々がこのメッセージ性の高い絵画の数々をみてどのようなことを感じられるのか、対話してみたいと強く思わせられた展覧会だった。(E.Z)



今田淳子展 —歓喜 Vol.2—

2010.11.20 ~ 12.5 上通コレクションOMO
熊本市上通町 4-14 096-356-4721

2009年に当館G3でも個展を行った今田淳子さんの展覧会。当館での展示の際にもアイ・キャッチとして大活躍した象のかたちの作品などをはじめとした小品が並ぶ。新しい展開として目についたのが、《まゆーいないいないばあ》シリーズで、まさに蚕のまゆのサイズの綿の固まりに、今田さんならではのアイコン・モチーフというべき、色とりどりの子鬼が歯を見せてかわいく威嚇している顔が包まれている。有機的なラインでならんだり、ぎゅっと1か所に固まったり、「集合」という形態のおもしろさを、小さな小さな箱のなかであっても表現できるところに、作家の力量が感じられた。やはり魅力的な作家である。(H.T)



絵画展 散歩道 其二

2010.12.21 ~ 2011.1.7 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町 10 番 25 号 323-1158

崇城大学芸術学部洋画コース卒業生4名によるグループ展。正統派の油彩による具象風景画から、抽象的な要素が強い作品、マチエールへの徹底したこだわりが伺える作品やポップな題材と描写の作品まで、幅広い画風の作品が楽しめた。小品が中心だがいずれも丁寧に作りこまれており技術的な支えもしっかりとしていた。普段から親しく交流している4人で開催したとのこと。画風はずいぶん異なっていたが、その個性の違いが響きあい魅力的な展覧会となっていた。(M.F)



第 51 回熊日書道展

2010.12.14 ~ 12.19 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町 2-18 096-351-8411

県内書壇で、最大、最高の熊日書道展である。毎年、漢字、かな、近代詩文書、少字数書、てん刻、刻字、墨象の7部門であるが、墨象の応募がなく、6部門で437点の中から207点の入賞、入選が選ばれた。日展評議員の星弘道氏(漢字)と清水透石氏(かな)によって審査された。

グランプリの熊日賞は下山杏華さんの漢字「陶淵明の詩」で、熊本県賞は、神園明子さんの「かな作品」。熊本市長賞は志水幸子さんの近代詩文「良寛のうた」であった。さらに特選31点を選ばれた。また同展の委嘱、無鑑査作家64人の作品も展示されていた。会場は6部門の新鮮で力強い漢字、大字書作品、流麗な筆使いのかな作品など多彩で参観者も多かった。(S.K)

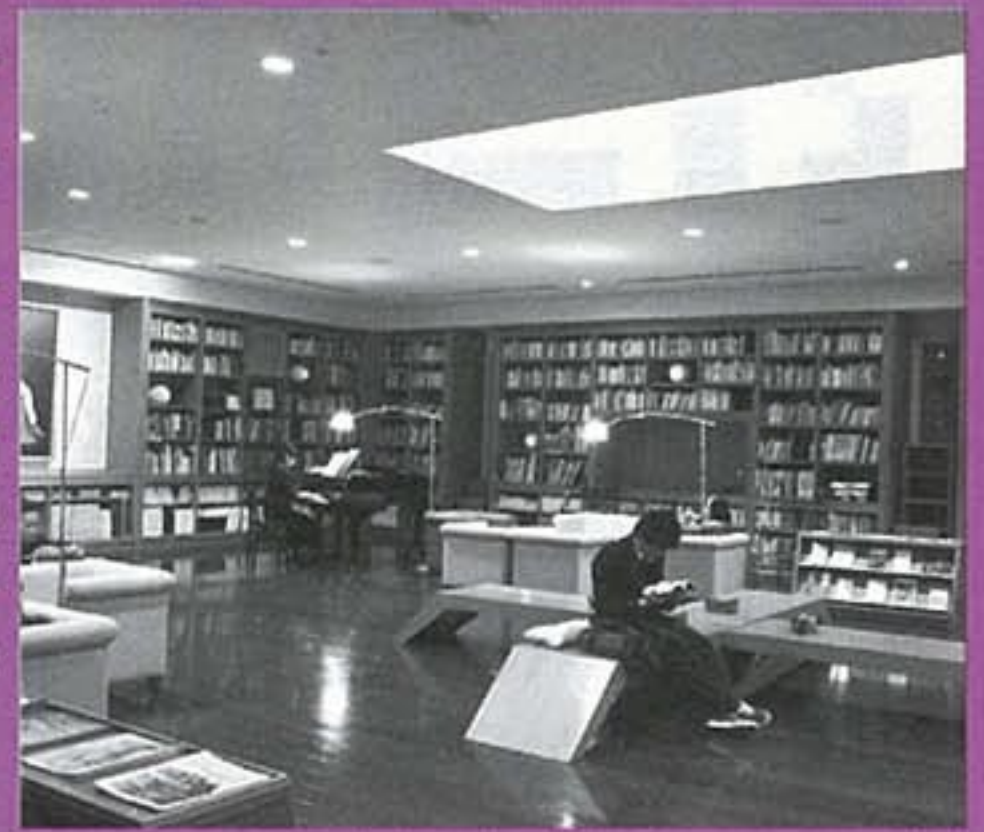


ホームギャラリーからのお便り vol.4

LETTER FROM HOME GALLERY

図書室にピアノ?

図書室＝静かに本を読む場所というイメージが強いですね。それなのにホームギャラリーにはピアノが置いてあります。「なぜ?」と思われる方が多いかもしれません。当館では開館以来、每晚7時から30分間ピアノボランティアの皆さんにピアノを弾いていただいています。昼間はクラシックなどのBGMを流していますが、夜はちょっと大人の雰囲気、照明を落とし、ピアノの生演奏が楽しめる空間に変わります。もちろんその時間帯も読書されている方もいらっしゃるので、BGM 代わりに静かな曲を選曲していただいています。7時から30分間ピアノの生演奏を楽しんだあとは…。そう、ホームギャラリーからのお便り vol.1 でご紹介したジェームズ・タレルの光のショーが始まる時間。聴覚から視覚へと空間が変化する、閉館に向けてのちょっとしたしなかけが毎晩楽しめるのです。ちょっとお洒落なナイト・ミュージアムに足を運んでみませんか。(E.Z)



VISITOR'S LETTER

[来館者のみなさんからのメッセージ]
アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します。

古屋誠一 メモワール.&サイコアナリシス展

- メモワール展の方は、壁一面に貼られたクリスティーネの写真が、古屋氏の「彼女の中に自分を見る」という言葉通り優しく悲しくただ過ぎ去った過去が今の自身へと何かを伝えるかのように染みいって涙が出そうになりました。(20代、女性、熊本県内)
- 普段気にとめないようなシーンだったり、日本の中では味わえない雰囲気だったり、多くの影響や印象を持ちました。(20代、女性、熊本市内)
- 兼ねて触れることのできない文化、芸術に出会って心豊かになりました。(60代、男性、熊本県内)
- ものすごくエネルギーを感じた。(20代、女性、熊本市内)

舟越桂 2010 展

- 彫刻を全方向からみられる等ゆっくり見る事ができました。舟越さんの作品は本当に大好きで、今回初めて見る作品もあり大変感動しました。(40代、女性、福岡県)

館内について

- いつもホームギャラリーでマンガを読んだり、ピアノを聴いたりとのんびり過ごさせてもらっています。月曜ロードショーも最近来るようになりました。お気に入りです。(20代、女性、熊本市内)

編集後記

AKLは、なんと今号で発行50号の佳節を迎えました。今後も、美術館活動の「いま」の記録を、美術館ファンのみならずへまっすぐお伝えするための広報誌として、1号ごとの着実な進歩を目指してまいります。今年もどうぞよろしくお願いたします。

編集長 富澤治子

今年最初のAKLはちょうど50号を迎え、舟越桂さんが記念すべき新しい年の顔となりました。「言葉をつかむ手」という作品で、凛として少し遠くを望むような瞳を見上げていると新年の心地よい緊張感と響き合うようで清々しい気持ちになります。また一年、気持ち新たに精進して参りますので今年もどうぞよろしくお願いたします。

担当 大岩みゆき

- 発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.50 2011年1月発行(冬号) ◎無料◎
- 発行人/桜井 武 編集/富澤治子、大岩みゆき
- デザイン/(有)松永 壮デザイン事務所 ●印刷/シモダ印刷
- 発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧

*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

- 兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
- 森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
- 本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
- 藏座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
- 富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
- 坂本顕子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
- 芦田彩葉
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
- 矢加部咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

WORLD NEWS

2010 台北ビエンナーレ



陳界仁 (チェン・ジエレン) <factory> (2003)

9月7日から11月14日まで、台北市立美術館で行われていた台北ビエンナーレに行ってきた。2010年は、日本では「瀬戸内国際芸術祭」、「あいちトリエンナーレ」、その他アジアでも「光州ビエンナーレ」、「釜山ビエンナーレ」、「メティア・シティ・ソウル」など、多くの国際展が行われた年でもあった。そのような中で行われた「台北ビエンナーレ」も、規模や予算が減る中で国際展を行っていくことの意義を考えさせられる内容だった。

キュレーターには、台湾出身の Hongjohn Lin (アーティスト) と、Tirdad Zolghadr (雑誌「Frieze」ライター) を迎え、台北・アジア地域に加えヨーロッパの作家 24 名を迎えた展覧である。入口には台北ビールの協賛による Superflex の「FREE BEER factory」が目を引く。残念ながらパーティの時間にはぶつからなかったが、会期中定期的に台湾ビールが無料で飲めるパーティが開かれ、このビエンナーレの「顔」ともなっていた。また、Shi Jin-Hua「X Trees in Taipei」は、ヨーゼフ・ボイスの樅の木のプロジェクションを想起させ

るかたちで、台北市美術館の位置する公園で大規模に行われる「台北国際花卉博覧会」のために伐採された樹木の問題に言及していた。多くの観光客が押し寄せるであろう博覧会のスペクタクル性と、予算規模の縮小を余儀なくされる美術展の関係性をいみじくも象徴していた。

他方、同時開催されていた陳界仁の回顧展「在帝國的邊界上—陳界仁 1996—2010」は、その作品世界を振り返る充実したものであった。当館で2008年に開催した「メモリア—まなざしの軌跡」にも出品された陳の作品「factory」(2003) は、産業の転換により起こった工業の衰退と失業者の記憶を、古い縫製工場に忍び込んで撮影したものだった。その他、スペインのソフィア王妃芸術センター委嘱制作の「軍法局」(2008) は、陳が幼い時に近くに住んでいたという「軍法局」をモチーフに、戒厳令下の台湾の政治犯や失業者、ホームレスなどをテーマに、台北市内の古い自動車工場で行った大作である。今や国際展の常連となった陳だが、その視線は揺れる国家の下に生き

る人々の暮らしや生活がモチーフとなっている。また、会期中に国立美術館への派遣を一方的に解雇された二人の女性の再雇用と待遇改善を求める記者会見の場として展覧会場を提供するなど、哲学者のような静かな風貌の一方で、アーティストとしての行動も活発である。

台北ビエンナーレに話を戻せば、会場以外にも7か所の市内のアールスペースと連携したり、また、楊俊がビエンナーレ内で提案した台湾のアートセンターをつくるプロジェクトを王俊傑を引き継ぐ動きがみられる。台湾は、隣接する中国との関係で常に政治的な緊張がある一方で、経済としては日本と同じく国内外に巨大なマーケットがあるというわけではない。そして、決して大きいとはいえない、手作り感のあるアートシーンであるけれども、アーティストたちが責任を持って政治的な発言を行い、自分たちの手で発表する場所を開拓していくとする姿勢が清々しく感じられた。(A.S)

SUITOTTO KUMAMOTO

CAMKフレンドインタビュー

※今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。

【スイットット・クマモト】

今年、創立100周年を迎えた映画館「Denkikan」四代目代表、窪寺洋一さんにお話を伺いました。



Denkikan 代表
窪寺洋一さん

Denkikan について

電気館は1911年(明治44年)1月1日に創立しました。映画館を創設した初代窪寺喜之助は当時、活動弁士*として活動しており、全国各地を長崎県出身の実業家である梅屋庄吉とともに回っていました。当時、電気は最新技術や最新の流行の代名詞でした。国からの奨励もあり、映画館は「電気館」と呼ばれ、浅草をはじめ全国各地に広がっていきます。九州でも劇場建設の動きがある中、まず長崎、次に熊本に作られました。当時電気館は全国に70件くらいありましたが、現在までその名を残した映画館はほとんど残っていません。熊本の電気館は来年創立100周年を迎えます。これは日活や松竹、アメリカの大手配給会社と同じくらい長い歴史を持っているんですよ。

*活動弁士…活動弁士(かつどうべんし)は、活動写真すなわち無声映画(サイレント映画)を上映中に、その内容を語りで表現して解説する専門の職業的解説者。

街なかの映画館としてのこれから

僕はソフトありきなので映画次第で変わっていきませんが、最近は本やテレビドラマ、インターネットで流行したものの延長で映画が作られることも多くなりました。そんな中で生き残っていくために大切なことはやはり中身だと思えます。映画でしか表現できないオリジナリティのあるドラマや娯楽作品、製作者のメッセージが伝わるドキュメンタリーなどを念頭に上映作品を選び

ます。街なかの映画館は全国的に減ってきてはいますが、映画という文化を継承する意味も含め、老舗の多い街なかから新たな発信をすることが大切だと思います。これからも街なかの強みを生かし若い世代にも映画ファンを増やしていきたいですね。

美術館にメッセージを

現代美術館が街の中心部にあって熊本の人は恵まれているなあと思うのです。例えば外国へ行くと、ピカソ美術館ではたくさんの観光客のいる中で、子供たちがピカソの原画を見ながら普通に絵を描いている。そんなふうに住む子供から日常的に原画に触れる機会があれば、それなりに良い才能が生まれるかもしれないし、将来そういう目を持った人達が育つのではないかなと思います。映画も似ていて、同じ文化を発信するような所として僕らとしても心強いところがあります。それに、本屋さんやギャラリーが多い所は街全体に活気を感じます。そんな中で次世代のクリエイターが生まれていくという繰り返しの意味で人が多く集う「街なか」に美術館が存在する意味は大きいと思います。今後も次世代を育むような、皆に親しまれる美術館として根強くやってほしいと思っています。